

学校生活における生徒の適応課題の早期発見と支援

宿毛市立沖の島小学校 教諭 森 百梨佳

1 はじめに

学校現場では、「不登校」「いじめ」「問題行動」「虐待」等、子どもたちの心のケアを必要とする深刻な問題に直面する。また、多くの子どもたちが良好な人間関係をうまく築けなかったり、過度の緊張や不安、ストレスに潰れそうだったり、様々な悩みや苦しみを抱えている。いろいろな要因が考えられるが、誰にでも社会的不適応や学校不適応の状態になってしまう可能性があるといえる。よって以前にも増して、児童生徒理解や仲間づくり等、問題を未然に防ぐ支援や取組が重要になっている。

本研究では、学級満足度を把握する Q-U（質問紙法）と高知大学医学部神経精神科学教室井上-加藤-近藤方式（以下省略）S-HTP（描画投影法）の二つの心理テストを併用する高知大方式生徒支援システムを研究実践校である A 中学校全学年で導入する。その結果から、問題行動の発生を予測して、特に支援を要する学級を研究対象学級に選ぶ。そして、生徒の学校生活における適応状態を把握し、どのような学級支援や個別支援が適当であるか支援法を考え、実践することで、生徒が不適応の状態になることなく、楽しく積極的に安心して学校生活を送ることができる学級づくりを提案したい。

なお、この生徒支援システムは、平成 17 年からの高知大学医学部神経精神科学教室（心理教育プログラム）と研究実践校との共同研究によって学級全体の課題や、個々の児童生徒が抱えている適応状態を早期に発見することができることと実証されている。しかし、S-HTP の分類法は、煩雑で分かりにくく難解であった。そこで、今回、これまでの研究成果を基にして、専門家の指導を仰ぎながら見直しと検討を行い、臨床心理学の知識が無くても容易に分類できる分類整理法に改めることにした。

2 研究目的

S-HTP の新たな分類整理法（S-HTP 改訂版）の作成と生徒の適応課題の早期発見及び、その適応課題を解決して良好な集団・人間関係をつくるための具体的で効果的な支援策を実践研究し、「再テスト法」と「行動観察法」を併用して効果を検証することを目的とする。

3 研究内容

(1) 高知大方式生徒支援システムの導入

ア 実施調査と方法

(ア) 描画テスト「S-HTP」

- a 準備物 ケント紙 1 枚（A 4）、HB 鉛筆 2 本
- b 教示 「家と木と人を入れて何でも好きな絵を描いてください。」
「裏に絵の説明を書いてください。」
- c 留意点 ・用紙は横に使用し、さしは使用しない。
・写生のように描いたり、人を棒人間に描いたりしないようにする。
・絵の上手下手を見るのではない。
・いい加減でなくできるだけ丁寧に描く。
・隣の人の絵を見たり邪魔したりしない。

(イ) 楽しい学校生活を送るためのアンケート「Q-U」

市販の用紙を利用する。

イ 実施回数と時期

1 回目……5 月 2 回目……10 月 3 回目……1 月

ウ 整理方法

(ア) S-HTP の分類

—S-HTP 改訂版分類整理法—

分類	分類基準	適応状態	見立て
圧縮	◇家・木・人のみ描かれ構成に配慮がない。	<ul style="list-style-type: none"> ・課題に対し、反応が硬く自由さが無い。 ・対人関係が広がらない。 	家・木・人が用紙の隅に小さく描かれているものは、チェック（要配慮）またはカンファレンス（要支援）。
不全	◇家・木・人に付加物があり1つ1つはよく描けているが、それぞれとの関係や構成、大きさに配慮が乏しい。	<ul style="list-style-type: none"> ・現実への順応を優先させ、個性が出せない。 ・自己の世界を作ることが苦手である。 ・対人関係が広がりにくい。 	一部に過剰、欠乏、不安定などの要素や暗さや寂しさがあるものは、チェック（要配慮）またはカンファレンス（要支援）。
調和	◇バランスよく構成にまとまりがあり、自由で豊かな表現ができています。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の世界を自由に表現でき、現実から大きく逸脱せずに対応できる。 ・課題に対して柔軟に反応し、適度な余裕や遊び心がある。 ・周りの雰囲気合った対応ができる。 ・対人関係が豊かで、心も安定している場合が多い。 	一部に過剰、欠乏、不安定などの要素や暗さや寂しさがあるものは、チェック（要配慮）またはカンファレンス（要支援）。
破壊・攻撃	◇攻撃性、破壊性、統制の不良が見られる。	<ul style="list-style-type: none"> ・心がコントロール不良の状態にあり、問題を抱えていることが行動面にも表れる。 	カンファレンス （特に個別支援が必要）
未熟	◇絵の表現が未熟で、混乱性が見られる。	<ul style="list-style-type: none"> ・行動面において幼さが残り、未熟、混乱、幼稚な表現が見られる。 	カンファレンス （特に個別支援が必要）
逸脱	<ul style="list-style-type: none"> ◇攻撃性はないが、教示からの逸脱がある。 ◇孤独、逃避性が見られる。 ◇何かのメッセージ性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・素直に課題に取り組むことができない。 ・現実から逸脱するような独特な自己の世界を持っている。 ・自己顕示性が見られる。 ・メッセージ性のあるものは、学校で目立たなくても心に問題を抱えている場合が多い。 	カンファレンス （特に個別支援が必要）

(イ) Q-U の分類

いごちのよいクラスにするためのアンケートを「承認得点」と「被侵害・不適応得点」の2つの得点から4つの群に分ける。

学級生活満足群、非承認群、侵害行為認知群、学級生活不満足群（要支援群）

エ 分析・考察方法

- ・Q-U、S-HTPの結果をまとめ、個人、学級、学年の状態（実態）を把握する。
- ・Q-Uの結果のプロット図にS-HTPの結果（チェック・カンファレンスとなった描画の結果）を重ねた複合プロット図を作成し、学級全体の課題を判断する。
- ・満足群の中でチェック・カンファレンスの描画となった生徒等、同じ群の中でもチェック・カンファレンスとなった描画とそうでない描画において、適応状態の違いを確認し、個別支援を要する生徒（困難な問題を抱えていると予想される生徒）を判断する。

オ 検討会

- ・調査結果のまとめと学級担任からの「事例提供」を合わせ、課題を確認する。
- ・学級支援と個別支援の対応を具体的に決め、取り組む。
- ・学校組織、学年組織として研究、研修など計画的に進める。

(2) 実践研究

ア 研究対象クラスの選定

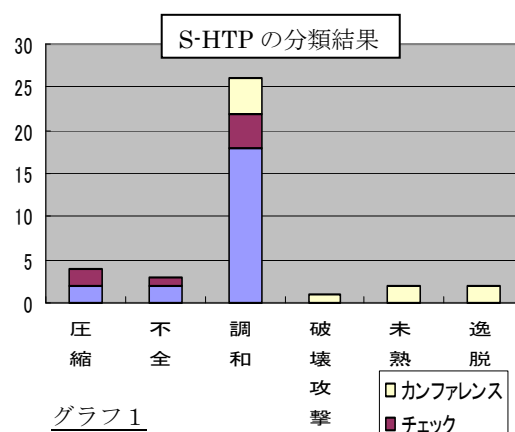
A 中学校全クラスで調査を行った結果、プロット図にばらつきが見られ、チェックやカンファレンスの描画も多いことから、特に支援の必要性を感じた2年生のあるクラスを研究対象とした。

イ Q-U、S-HTPの1回目（5月）の結果と分析・考察

Q-Uのプロット図はやや「拡散型」で、個人がめいめいに自己主張している状態であり、ルールとリレーションの確立が低く、相手を牽制しながら自分のペースを貫く傾向にあると思われる。また、「自分の考えがクラスや部全員の意見になることがある。」「学校内で私を認めてくれる先生がいると思う。」「自分が何かをしようと思ったとき、協力してくれるような友人がいる。」といった項目で承認得点の低い生徒が目立ち、周囲の目が気になる生徒、友達関係で悩んでいる生徒も多数いることが分かった。

グラフ1は、S-HTPの結果をまとめたものである。クラスの約半数が個別支援を必要とするチェックやカンファレンスとなった描画であった。描画の分類で本来、適応状態が良いとされる「調和」を見ても、チェックやカンファレンスとなった描画の割合が高く、内的まとまりが悪いと考えられる。

次に、もっと深く生徒の適応状態を探るため、プロット図にS-HTPの結果を重ねた複合プロット図（図1）を作成した。S-HTPにおいて描画がチェックやカンファレンスとなった生徒を■で表している。満足群に属した生徒の中に、チェックやカンファレンスの描画となった生徒がいた。つまり、Q-Uだけでは分からなかったが、その生徒は内面に問題やストレスを抱えている可能性がある」と判断できる。また、逆の場合もある。非承認群、



グラフ1

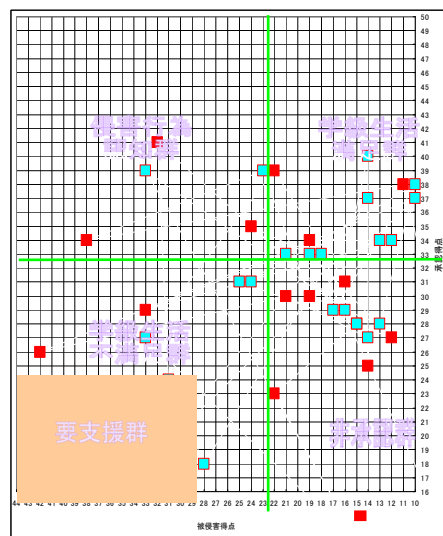


図1 Q-U、S-HTPの複合プロット図

侵害・認知行為群、不満足群（要支援群を含む。）に属していても、内的まとまりが悪くないものは比較的適応状態が良いと思われる。しかし、一貫性がなく混乱しているものは、今、心に何らかの問題を抱えていることが予想され個別支援を要すると考えた。

ウ 取組

(ア) アセスメントの実施（※10月の2回目の実施調査後も結果分析等同様に行う。）

結果及び分析・考察のまとめと学級担任からの事例報告を基に、適応課題を抱えていると思われる生徒を確認し、支援方法や取組内容を話し合った。

a 学級の状態（学級担任からの報告）

- ・全体的におとなしく、あまり活動的でない。
- ・冷めた態度の生徒がいたり、リーダーが育っていなかったりとクラスにまとまりがなく、協力しようという意識が低い。
- ・時間が守れない。
- ・忘れ物が多かったり、提出物が疎かになったり、教科によって授業が騒がしくなる。
- ・欠席が多く、不登校が心配される生徒と、不登校傾向にある生徒がいる。

b 支援方法

[学級支援]

- ・特活や道德の時間を利用し、人間関係、集団づくりに重点を置いた取組をする。
- ・体育祭や文化祭等の行事に向けての取組を充実させる。

[個別支援]

- ・心配なことや困っていることなどないかどうか教育相談的な時間を設けるなど、生徒理解に努め問題を把握し、教員間や家庭と情報交換等の連携を図る。
- ・自信や意欲を持たせるために、個々の頑張りを認める場面を設定して肯定的評価を大切に励ましなどの声掛けを心掛ける。
- ・係活動や委員会活動、部活動において充実感ややりがいを感じられるよう支援する。

(イ) 「仲間づくりの活動」の実践（※資料1）

ルールとリレーションを確立する必要性があることから、人間関係づくり、集団づくりを目的としてプロジェクト・アドベンチャー（PA）の手法を用いた活動を取り入れたいと考えた。これは、「アクティビティ」と呼ぶ様々な活動を通して、ゲーム感覚的にグループ体験を促すよう工夫された活動である。表面的には分からない学級の実態や個人の適応課題も浮き上がってくる。しかし、体験するうちに活動の目的や内容の意味を体感していくことで、感情面と行動面での変化が起こりやすい。そこで、グループ活動を中心に行い、個人とグループの目標達成に焦点を当て、学級の実態に合わせた「アクティビティ」のプログラムを作成することにした。そして、全8時間の授業を実施した。毎回、学級の状態を見ながら、どのような「アクティビティ」が良いか検討した。「アクティビティ」はやって楽しいものを選び、まずは抵抗の少ない同性同士でのかかわり合いから、徐々に男女協力しなければ課題解決できないプログラムを設定していった。また、体育祭、文化祭においてもこの手法を生かした取組を行った。決して強制するのではなく、自己を客観的にふりかえり見つめる機会と「気づき」を大切にしたい学びを提供することを心掛けた。授業の最後に生徒が書くふりかえり個人シートには、アドバイスや生徒の意見に対するコメントを必ず書いて返却した。すると、ふりかえりシートに書く内容も少しずつ深まり、生徒に提示した目標「みんなで楽しむこと」について考える生徒が徐々に増えていった。1学期当初、まとまりに欠けていたクラスが、達成感や楽しさを味わい、ルールを守ることの大切さを実感しながら、授業を行うごとに進んで協力し良好な仲間関係を築こうとするクラスへと変化して行くのが明らかに見て取れた。クラスや自分自身の変化を生徒も感じたようだ。（※資料2）

エ 再テスト法の実施と分析・考察

再テスト法を用い、本研究での支援方法と取組の効果を検証するため、3回目（1月）に実施したQ-UとS-HTPの結果を、1回目（5月）の結果と比較する（図2、グラフ2）。

Q-UとS-HTPの複合プロット図を見ると、やや「拡散型」から「学級生活満足群優位型（右上型）」に移行し、チェックやカンファレンスとなった描画の数も随分減少していた。生徒の適応状態において、支援の効果が実証できた。

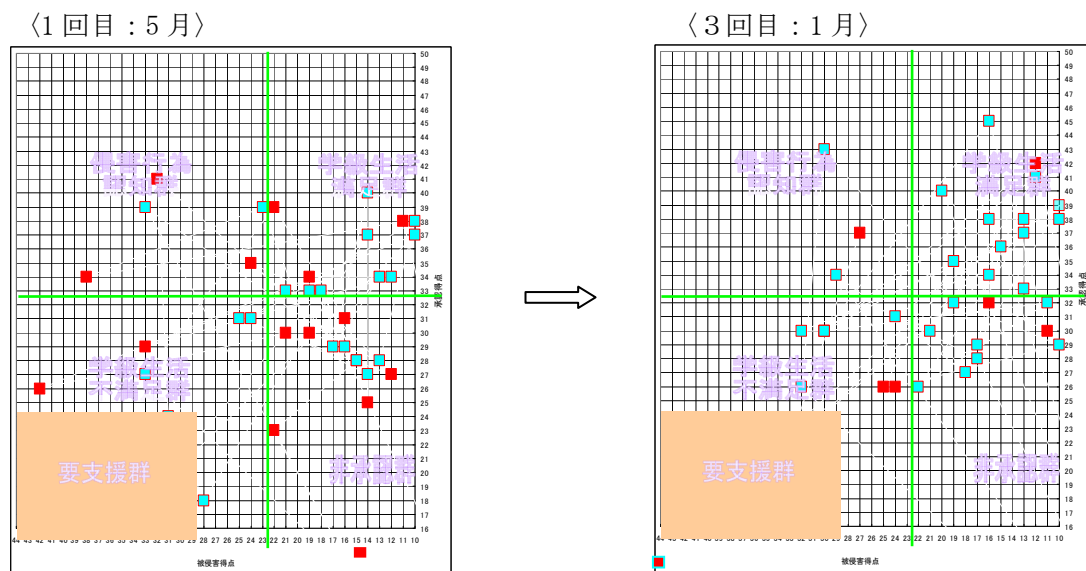
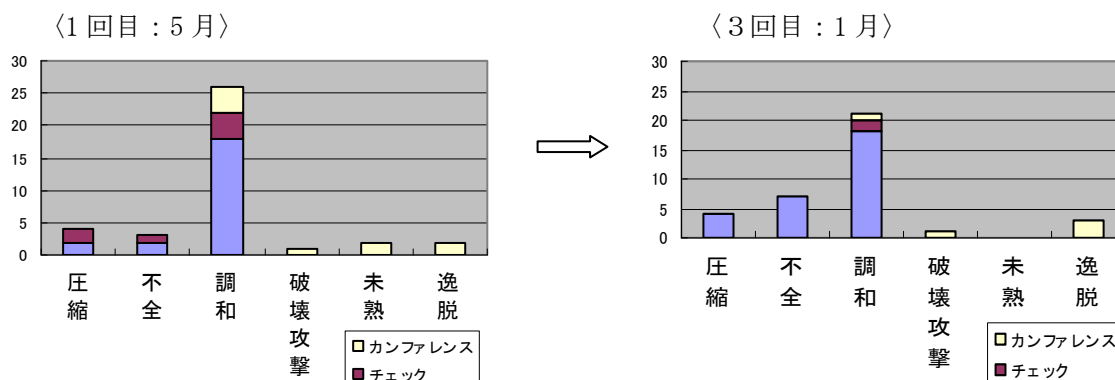


図2 複合プロット図比較（※ ■はチェックやカンファレンス描画の生徒。）



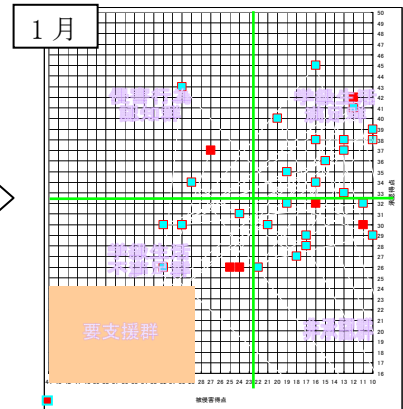
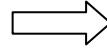
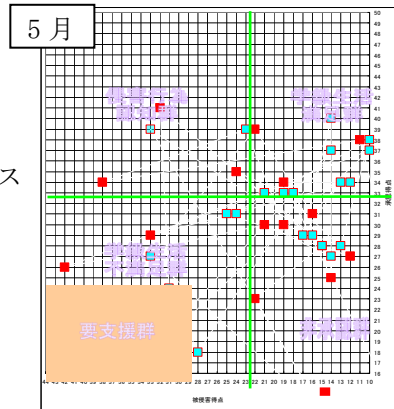
グラフ2 S-HTPの分類比較

Q-Uで見ると、満足群と不満足群が増え、非承認群と侵害行為・認知群が減っていた。結果が良い方へ移行した生徒が、悪い方へ移行した生徒よりも2倍と多かった。その中で、大きな変化があったのは、欠席が多く不登校が心配された生徒である。今は体の不調を訴えることなく、元気に登校しているその生徒は、要支援群から満足群へと移行していた。母親の支援もあって、抱えていた問題が解決したと考えられる。

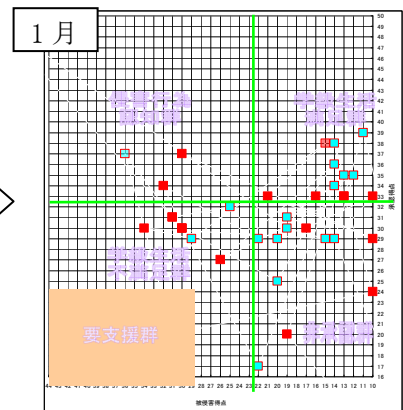
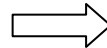
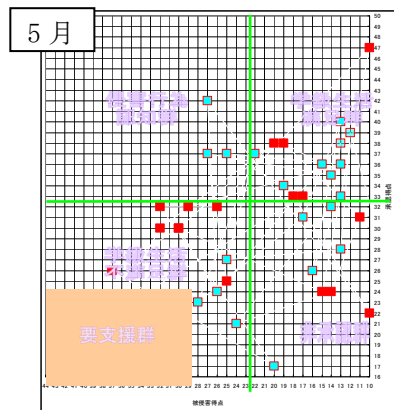
次に、S-HTPの描画の変化を個人別に見てみた。まだまだ支援の継続が必要な生徒がいる。そして、新たに何らかの問題を抱えていると思われる生徒がいることも把握できた。しかし、1回目の調査でチェックやカンファレンスとなった描画の生徒16名のうち、3回目の調査で、10名の生徒がチェックやカンファレンスの描画でなくなり、描画における適応状態が良好に転じていた。反対に、チェックが新たに付いたのは1名だけだった。心の安定がうかがえ、個別支援を行った生徒に対しての支援の効果が確認できた。（※資料3）

〈他のクラスとの比較〉

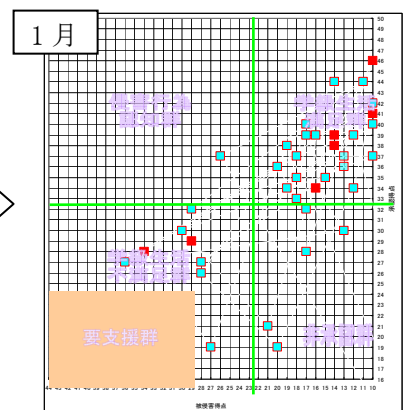
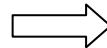
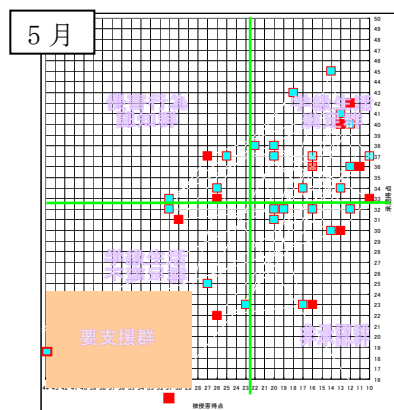
2年
研究対象クラス



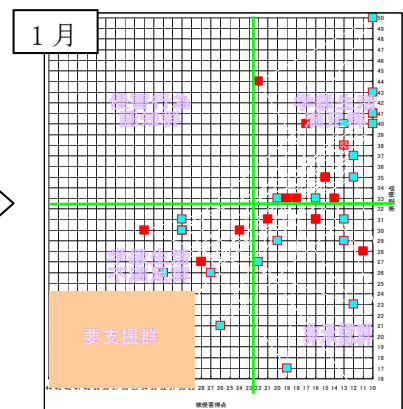
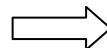
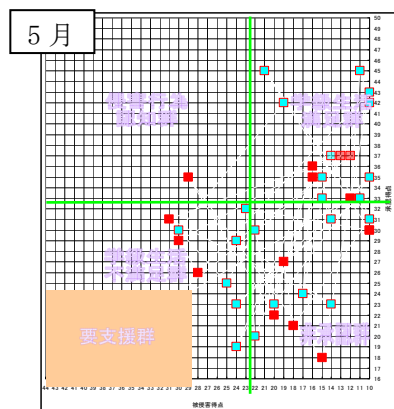
2年イ組



2年ロ組



2年ハ組



他のクラスの複合プロット図と比較してみた。すると、1月の結果では、研究対象クラスは2年ロ組に次いでプロット図がまとまっていることが分かる。2年ロ組は5月の段階でまずまずプロット図がまとまっていたことを考えると、実践研究の取組に有効性があったといえる。

オ 取組成果

個別支援や「仲間づくりの活動」を通して、学級委員がリーダーとして動けるようになり、学級集団としてのまとまりができた。提出物を出す、時間を守るといった基本的なルールを守る生徒が増え、掃除等を協力してできるなど学校生活が随分落ち着いたように思われる。作業や活動、班会の中で、男女交えて話し合う場面が多々みられ、男女間でも仲良く協力できるようになった。それまでのよそよそしさが減った。実際、A中学校の教員からは、「学年の中で、今一番授業がやりやすい。」という声を聞く。また、このクラスで楽しくできた「仲間づくりの活動」が、他のクラスでは成立しなかったという報告も受けている。

4 まとめ

Q-Uの質問は自身の学級適応感に焦点化され、数値化されるので、児童生徒の心理を把握しやすい。しかし、Q-Uにも弱点があることが分かった。自己評価式であるため、自分を客観視できず無批判に動く生徒や、適応的だが内省的で自己批判傾向の強い生徒は、座標にプロットされた位置の信頼性が薄らいでしまう。今回の調査でもそういう傾向にある生徒が見られた。そこで、S-HTPを併用し、Q-UとS-HTPの結果を重ねて分析することで、本当に支援を必要とする生徒の早期発見に生かすことができた。また、描画は自分自身を投影しやすく、チェックやカンファレンスとなった描画は、無意識のうちに自分でコントロールできない悩みや苦しみが表出していた。このことが生徒理解と適応課題の把握につながった。

次に、適応課題の解決に向けた効果的な支援として、継続した学級全体の支援と個別支援の取組が重要だと感じた。1回や2回の取組では、簡単に良くならない。取組効果の高さは、同学年の他のクラスと比較しても明らかになっている。人間関係づくりに定期的に取り組んだこと、個に応じた支援を続けたことによって、生徒の内面に徐々に働きかけ、心の安定を図ることができたと考える。今回は、支援チームとして学級担任と養護教諭と連携を図り、常に情報交換や「仲間づくりの活動」の打ち合わせを行いながら、同じ課題認識を持って取り組んだ。取組を継続させる手立てとして、担任だけに負担を掛けず支援チームを作るなど協力体制が不可欠である。

課題としては、やはり個別支援の必要な生徒がまだまだいるということである。心の問題は、解決に時間を要する。早急な解決を求めるのではなく、生徒の心に寄り添った支援をしていかなければならない。また、今回用いた高知大方式S-HTPは、パーソナリティーが確立されてくる小学校高学年からしか適用できない。今後、小学校低学年から適用可能な描画テストを開発できればと思う。

5 終わりに

本研究の目的の一つが、適応課題の早期発見を可能にする高知大方式生徒支援システムの中のS-HTPの分類法を新たに作成することであった。難解な分類法では、広く普及できない。新しくできた分類法の研修会をA中学校で行ったところ、知識のなかった教員でも数十枚の描画の分類を繰り返すうちに、分類のポイントを掴むことができるようになった。児童生徒理解に多くの学校でQ-Uが導入されるようになったが「Q-Uを実施しても、どう活用すればいいのか」という多くの声を聞く。そんな先生方の参考になればと思う。また、自分自身、学習意欲の向上と学力の定着を図るためにも、この研究を生かして、いじめや不登校など学校不適応の状態にならないような環境、児童生徒が安心して学習できる環境づくりに努めていきたい。

〈参考文献〉

- ・河村茂雄「Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド」図書文化、2004
- ・プロジェクト・アドベンチャー・ジャパン「クラスの間人間関係がぐーんとよくなる楽しい活動集」学事出版、2005
- ・山本多江「生徒理解・教育相談についての研究－生徒支援システムづくりの実践（Q-U・S-HTP）－」高知県教育センター長期留学研究生研究発表論文、2006